

保育者養成における多様性の理解と世代間交流の実践に関する一考察
 - 保育現場の世代間交流実態調査と保育者養成校教員への調査から -

山田秀江* 木村美佳*

A Study on Understanding Diversity and Intergenerational Exchange Practices in Childcare Teacher Training
 -Survey of intergenerational exchange in childcare settings and a survey of teachers at training
 schools for childcare professionals-

Hidemi Yamada, Mika Kimura

保育現場での世代間交流実践に関する実態調査と養成校教員の世代間交流に関する教授内容やその意識について調査した結果、保育の中で世代間交流を実践するためには、保育者養成の段階で高齢者理解や世代間交流の実践力、多様な人々と連携する力を養成することが重要であるということが分かった。子どもたちが多様な人々とかかわり、相手を理解し心地よい関係を築いていくために、世代間交流の普及は今後ますます重要な実践課題であり、そのための保育者養成教育を探究していくことが求められている。

Key words: 世代間交流 保育 保育者養成 多様性 高齢者 乳幼児

第1章 問題

少子化の進行や都市化、過疎化の進行など社会状況が変化していく中で地域社会の連帯感が希薄化し、核家族が多数を占める今の乳幼児期の子どもたちは、日常的に地域の多様な世代の人々と触れ合う機会が減少している。(1996年中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国教育の在り方について」)

また、日本は世界でもトップの高齢社会であり、2019年には65歳以上の高齢者の割合が28.2%であった。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、今の子どもたちが社会の担い手となる2040年には35.3%になると見込まれている。高齢化社会を担っていく子どもたちが、身近な高齢者との関わりの中で、「命の尊厳」や「老い」、「死」について、考え学んだり、いたりや思いやりの気持ちをはぐくんだりすることは非常に重要なことである。(1997年中央教育審議会第2次答申「21世紀を展望した我が国教育の在り方について」)

そのような社会状況の中、多様な世代との交流、とりわけ乳幼児期の子どもと高齢者との世代間交流は、乳幼児、高齢者双方にとって効果が期待でき、重要な取り組みとなっている(金森、2012)。

世代間交流が意図的に行われるようになってきたのは、1960年代ごろからであり、産業構造の変化により

核家族数が増加したことによる(金森2012)。

1989年高齢者保健福祉推進10カ年策略(ゴールドプラン)や、1993年には高齢者福祉施設と児童福祉施設の合築・併設を促進するよう通知され、日常的な世代間交流がより一層求められてきた。学校教育では、少ない子どもたちを地域全体で育てようと、コミュニティ・スクール(文部科学省初等中等教育局)、地域学校協働本部(同障害学修政策局)といった事業の中で、世代間交流が行われている。

保育現場では、1995年子育て支援のための総合計画(エンゼルプラン)、2000年新エンゼルプランに基づき、保育所地域活動事業が推進され世代間交流が推し進められている。平成30年に改訂された幼稚園教育要領等では、幼児期の終わりまでに育てほしい姿の中に、「オ 社会生活との関わり」を挙げている。家族を大切にす気持ちと地域の身近な人と触れ合う機会をもち、地域に親しみ、周りの人の気持ちを考え行動できるように育てることを目標としている。また、領域「人間関係」の内容には、「③高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」とあり、多世代交流を通して、互いに尊重し合い共感し合える関係を作り、人と人との絆を大切にできる子どもを育てることが重要とされている。

先行研究においては、世代間交流の効果について、渡辺(2004)は、介護福祉分野での世代間交流プログラムは、well-beingの向上と地域作りに有効な方法であると述べており、王ら(2016)は、世代間交流は、

* 四條畷学園短期大学 保育学科

幼児の高齢者イメージ・高齢者観の形成に影響を及ぼすと述べている。さらに、藤原（2012）は、世代間交流については、万人から推奨されることであるが、具体的には普及しにくいのが現実であると述べており、その交流を阻害する要因を3つ掲げ、その3つ目に世代間交流事業を企画・運営する上での職員の負担を挙げている。さらに、普及に向けた方策を2つ掲げ、1つ目には職員を含め関与する人すべてに互恵的なメリットがあること、2つ目には、世代間交流プログラムの科学的、客観的な評価手法の導入が重要であることを挙げている。

また、金森（2012）は2000年から2011年までの世代間交流研究の調査の結果、子どもに関する研究としては、幼老統合施設での実践報告が主だった研究であり、世代間交流を活性化させるためには、幼稚園・保育所等の乳幼児保育教育施設での世代間交流の研究が必要になってくると言及している。さらに、世代間交流を考えると、高齢者と子どもの立場からのみ考察するのではなく、世代間交流を企画する保育者や介護者の世代も含めた三世交代として捉える必要性も述べ、「保育者が高齢者を介助し援助すべき対象、生きがいを与えるべき対象として接するのと、子どもたちの生活している社会を築いてきた先人として捉えるのでは子どもに与える影響は異なる」としており、保育者自身が世代間交流に対して、どのような意識を持って取り組んでいるかということが重要である。

また、世代間交流に対する積極的姿勢を育むために保育者養成校での指導のあり方を検討することも必要である。吉津ら（2019）は2011年より保育者養成課程の4年次生を対象とした複合福祉施設における子どもと高齢者の世代間交流を核とした実習教育（クロス・トレーニング・プログラム）を実施し、乳幼児と高齢者との世代間交流を保育者養成の視点から研究している。クロス・トレーニング・プログラムを経験した学生と経験していない学生では、(1)世代間交流への支援について肯定的な認識(2)高齢者への支援に対する肯定的な認識(3)高齢者に対して親しみやすい印象の3点について、差異がみられ、このプログラムが学生の世代間交流に関する認識に影響を及ぼす可能性を導出した。このように世代間交流を企画運営する保育者の役割は大きいにもかかわらず、保育者の視点や保育者養成の視点からの、世代間交流に関する研究はまだまだ少ない現状がある。

本研究では、研究Ⅰとして、保育現場での世代間交流の実態についてのアンケート調査と日常的に交流を行っている園の実践報告から、世代間交流の活動内容とそれに基づくメリットや課題を浮き彫りにし、世代

間交流を担う保育者の役割や必要な知識、技術について探究する。さらに、研究Ⅱとして、養成校教員に対し、世代間交流に関する学修内容や教員の意識についてアンケート調査をおこない、現状や課題と教授すべき内容や方法を浮き彫りにする。研究Ⅰと研究Ⅱから得られた考察を基に、世代間交流に関する保育者養成教育の在り方を検討する。（本研究では世代間交流を乳幼児の保育教育施設の保育時間の中で実施されている、高齢者との交流と定義する。）

第2章 研究Ⅰ

1. 目的

本研究では、保育現場における世代間交流の実態に関するアンケート調査と実践事例報告から、保育現場の実情や保育者意識を明らかにし、保育者の役割や世代間交流を実践するために必要な知識や技術について探究する。そして、保育現場で世代間交流が普及するために必要な保育者養成教育について考察することを目的とする。

2. 方法

近畿1府1県内の8市にある保育所、幼稚園、認定こども園等、122箇所の乳幼児保育・教育施設を対象に、世代間交流の取り組みの実態等についてアンケート調査を行った。時期は2020年8月～9月に実施した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮に関しては、勤務先である四條畷学園の「教員の研究活動並びに研究倫理規定」に則って「研究実施計画申請書」を提出し、学内の研究倫理審査委員会により承認を得た。研究協力施設に、最初に本調査の意義と個人情報の配慮について説明を行い、承諾を得て行った。提供された情報については匿名で記述し、質問紙は統計処理を行い、個人が特定されないように配慮した。

4. 結果

全回答数は535名 回収率 54.8%（各施設に8部依頼、可能な人数の回答を求め、86施設から回答があった。施設からの回収率は70.1%であった。）

(1) 回答者の所属・経験年数・役職（担当クラス）

1) 所属

施設種別を図1に表す。認定こども園が56.1%、保育所が30.7%、幼稚園が9.5%、児童発達支援センターが3.7%であった。

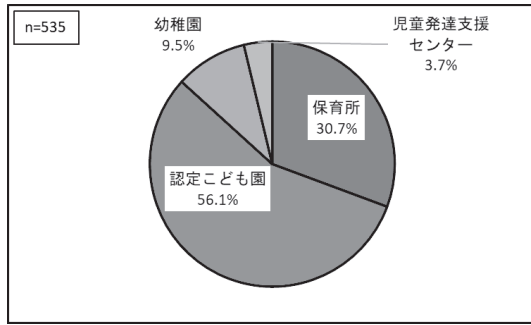


図1. 施設種別割合

2) 保育の経験年数

経験年数が10年～19年が26.7%と一番多く、次に20年以上が26.0%であった。1～3年、4～6年が約15%前後であり、7～9年目11.2%、1年未満は4.1%と少なかった(図2)。

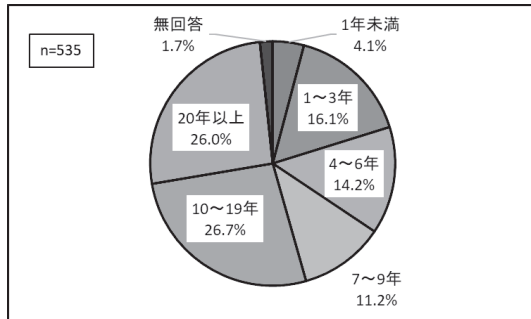


図2. 経験年数割合

3) 職務・役職 (担当クラス)

園長、副園長等の管理職が52名、主任が49名、担任が363名であった。ただし担任と主任等を兼務している施設もあった。担任の担当年齢が以下の図3のように縦割り混合クラス以外は、ほぼ均等であった。フリー、加配は58名でそれぞれの職域、役割からまんべんなく回答を得られた。

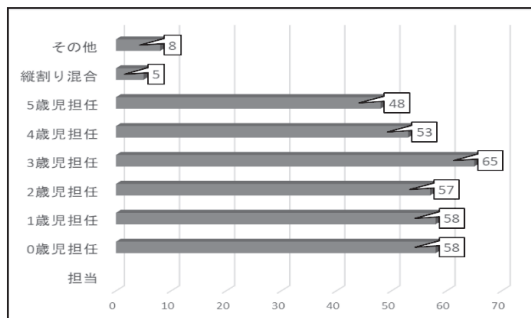


図3. 担当年齢

(2) 世代間交流実施について

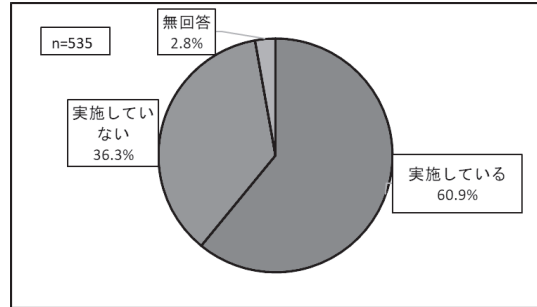


図4. 世代間交流の実施状況

1) 世代間交流の実施状況

世代間交流の実施の状況は、実施しているとの回答が全体の60.9%、実施していないとの回答は36.3%となった(図4)。

施設ごとでみると、一人でも実施しているという回答があった施設は70施設であり、回収できた施設の81%となった。個々の保育者等の回答と約20%の差が出ており、施設内で実施していても直接担当した経験がなく、実施していないと回答していると推察できる。

2) 交流活動後の子どもの姿や行動の変容

交流活動の後に見られた子どもの姿や行動の変容について、以下の(1)～(10)の選択肢から保育者自身が感じたことについて、複数回答で求めた(図5)。

- (1) 高齢者への関心・理解が深まる
- (2) 伝統文化(伝承遊び)への興味が深まる
- (3) 行動が積極的になる
- (4) 年輩者に対して尊敬の念を持つ
- (5) しつけ・礼儀をわきまえる
- (6) ものを大切にする
- (7) 弱者へのいたわりや思いやりのある行動をとる
- (8) 気持ちが穏やかになる
- (9) 特に変わりはない
- (10) その他

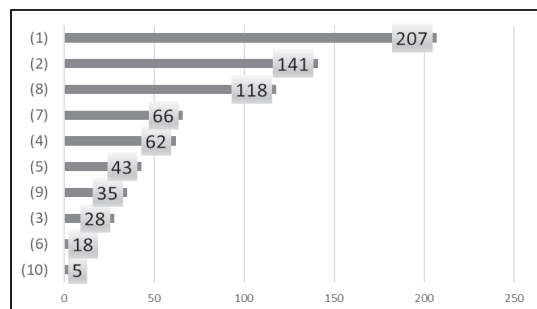


図5. 交流活動後の子どもの姿や変容

交流活動をすることで、高齢者への関心や理解が深まると207名（n=326, 63.4%）が回答しており、次に伝統文化（伝承遊び）への興味が深まると141名（n=326, 43.2%）が回答している。交流活動の内容として伝承遊びを取り入れ、高齢者に教えてもらったり、見本を見せてもらったりして、興味を持つ子どもが多いようである。また、次に気持ちが穏やかになると118名（n=326, 36.1%）が回答しており、高齢者に温かく迎えられたり、自分たちの発表を認めてもらったりすることで、穏やかな気持ちになっている子どもがいると保育者は感じていると分かった。

3) 世代間交流の負担について

世代間交流の負担感について、(1)大きい(2)すこしある(3)あまりない(4)ない(5)その他の5件法で回答を求めた。その結果を図6に示す。

負担感が大きい、少しあると回答した人は103名（n=326, 31.6%）で負担感があまりない、負担感がないと回答した人は191名（n=326, 58.6%）となり、負担感を感じている人より2倍近く多い回答数となった。

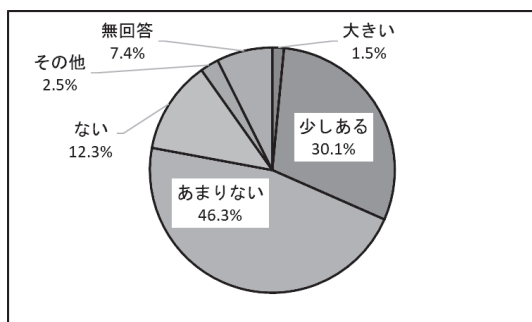


図6. 世代間交流実施の負担感

負担感についての回答理由を自由記述で求め、テキストマイニング（以下TM）による分析を行った（図7表1）。

TMでは、出現頻度が2回以上の主要語を抽出し、出現頻度の高い順に並べる言及頻度分析（喜田,2007）を実施。保育者の感じる世代間交流を実施する上での負担感の特徴的な主要語を明らかにした。

言及頻度分析の結果、上位5位以内の名詞は、「子ども」を筆頭に「高齢」「祖父母」「内容」「遊び」「園児」「人見知り」「関わり」であった。動詞は「思い」を省き、「感じる」「考える」「関わる」「伝える」「楽しめる」「泣く」「嫌がる」があった。

主要語からクラスターを可視化する共起ネットワークを作成し、質問に対する回答それぞれの理由が表記された。

表1. 負担感の理由に関する主要語の概要

質問内容	主要語の概要											
	文字数	抽出回数	名詞		動詞		形容詞					
			統計	出現頻度2以上	統計	出現頻度2以上	統計	出現頻度2以上				
世代間交流を実施することの負担感の理由	1554	96	400	135	77	76	48	82	48	28	19	14

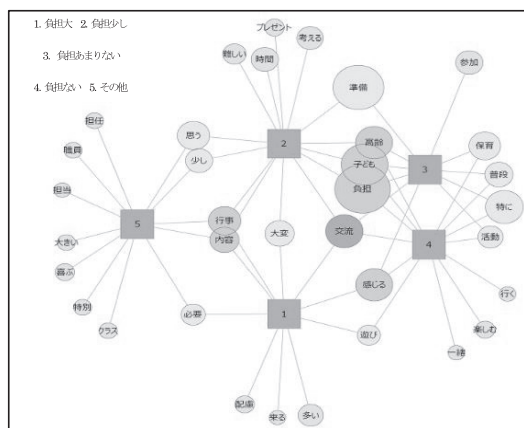


図7. 負担感有無を外部変数としたその理由に関する共起ネットワーク

主要語の分析は以下の通りである。世代間交流を実施している園において、105名の回答が得られた。「世代間交流を行う負担感」についての自由記述は87名であり、82.8%の人が回答。外部変数を入れた「負担が大きい」と回答した独立した主要語は「配慮」「来る」「多い」であった。「負担が少しある」と回答した独立した主要語は「考える」「プレゼント」「時間」「難しい」であり、「負担はあまりない」と回答した独立した主要語は「参加」のみであった。さらに「負担はない」と回答した独立した主要語は「行く」「楽しむ」「一緒」である。

4) 交流活動を通して難しかった点

交流活動を実施するにあたり、難しいと感じた点について自由記述を求め、TMによる分析を行った。(図8表2)

負担感と重複する語が多くみられた。全ての語彙を使用した共起ネットワーク図では、特にクラスター1では、「配慮」「身体」「不自由」「必要」があり、保育者は、養成校に置いて高齢期身体に関する学びがないことから、高齢者を保育施設側に招いた時に、身体配慮や、保育施設での環境面での工夫に苦慮している様子が窺えた。

クラスター2では、「業務」「日々」「企画」「作成」「プレゼント」「制作」では、日々の多忙な保育業務の

表2. 難しいと感じた点に関する主要語の概要

質問内容	主要語の概要											
	文字		抽出		名詞		動詞		形容詞		形態素	
	数	文数	語数	総計	言語頻度	子以上	総計	言語頻度	子以上	総計	言語頻度	子以上
交流活動を通して知った点	4234	234	687	386	309	56	246	193	95	100	83	29

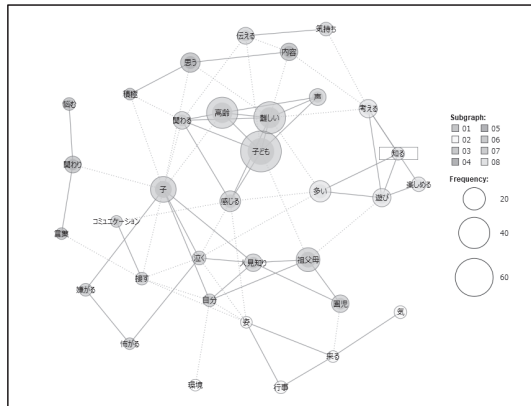


図8. 難しいと感じた点に関する共起ネットワーク

中で、プレゼント等制作を実施し、準備時間の確保から交流を困難にさせている要因があることが窺える。

主要語を名詞、動詞、形容詞に絞った共起ネットワーク図では、交流の困難において、子どもの姿が浮き彫りになっている。年齢によっては人見知りの時期、また子どもによって慣れない場所で不安がるという記述もあり、「怖がる」「嫌がる」「泣く」という姿が見え、先述したように世代間交流の実施年齢が低年齢であるほど、困難感が増す傾向がある。

5) 世代間交流を実施していないと回答した理由

世代間交流を実施しているかという問いに対して「いいえ」との回答は194名あり、実施していない理由を以下の5つの選択肢から複数回答で求めた。その結果(1)時間がとれない23.7%(2)連携先がない30.4%(3)安全の確保が難しい14.4%(4)保護者の理解を得るのが難しい3.1%(5)その他26.8%となった。その他が二番目に多い結果になったが、自由記述欄に「新型コロナウイルスの関係で計画はしていたが実施できなかった」という回答が11名あり、2020年度に限って実施していなかったということがわかった。質問の意図はこれまでの経験について尋ねることであったが、2020年度の特異な状況の中、表現が曖昧で誤解があったことは反省点である。

(3) 世代間交流に対する意識

1) 世代間交流の必要性

世代間交流の必要性を(1)はい(2)いいえ(3)どちらでもないの3件法で回答を求めた結果を世代間交流実施の有無別に表したものが図9、10である。

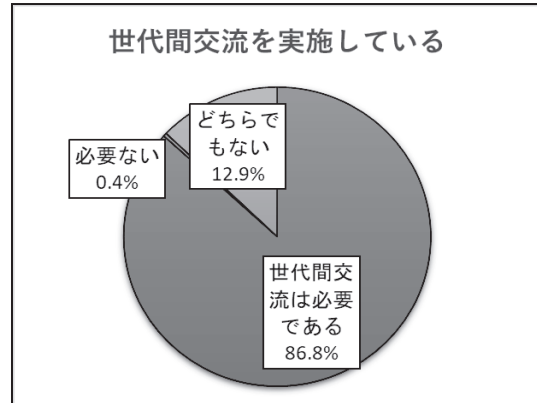


図9. 世代間交流の必要性 (世代間交流実施)

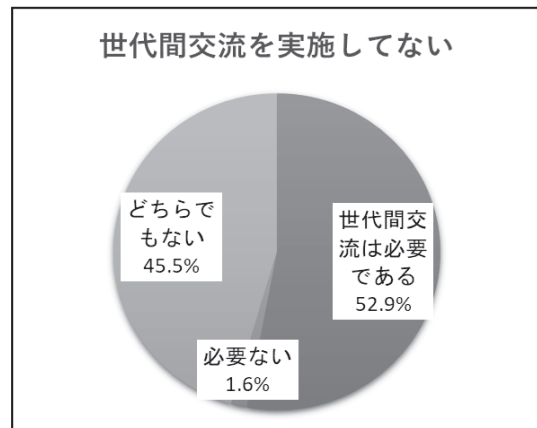


図10. 世代間交流の必要性 (世代間交流実施なし)

世代間交流を実施しているという回答では、世代間交流は必要であると86.8%が回答しているのに対して、世代間交流を実施していないという回答では、世代間交流が必要であるとの回答が、52.9%と30%以上の差が見られた。実施している園は子どもへの効果の高さを実感し、その必要性を感じていると思われる。

次に、世代間交流の必要性有無の回答理由を自由記述で求め、TMによる分析を行った(図11、表3)。

アンケート全回答者(n=535)中、必要性に関する記述は、世代間交流を実施している、していないに関わらず363名(67.9%)から回答が得られた。必要性に関しては、客観的な記述ではなく、個々の保育者の思いが入っているため、主要語一位に「思う」が入ったと思われる。

上位10には「交流」「高年齢」「子ども」「機会」「関わる」「人」「経験」「世代」「核家族」等、今日の時代の

問題点が考えられる語が抽出された。世代間交流の必要性では、現代の社会状況が反映される形になっていると思われる。そして、子どもの気持ちが育つこと、高齢者と接することで思いやりが育つといった、精神的な心の育ちを保育者が感じられたことが大きなメリットと言える。世代間交流を実施するにあたり、高齢者を園に招くことになった時に、保育者の負担感が増すことが明らかになった。交流を実施するのに必要な知識として、高齢者の身体状況や疾患の知識がないため、保育施設環境に招くことが難しいことがあげられていた。世代間交流のすべてがプラスに転じているわけではないことから、交流を実施する場所、乳幼児の対象年齢や時期、その日の健康状態等を考慮する必要があることもわかった。

表3. 必要性の理由に関する主要語の概要

質問内容	文字		抽出		動詞		形容詞		
	数	文数	語数	語数	総計	語頻度 2以上	総計	語頻度 2以上	
	文字	(文)	(語)	(語)	(語)	(語)	(語)	(語)	
世代間交流は必要かの理由	7481	413	792	650	738	78	264	605	59
								166	153

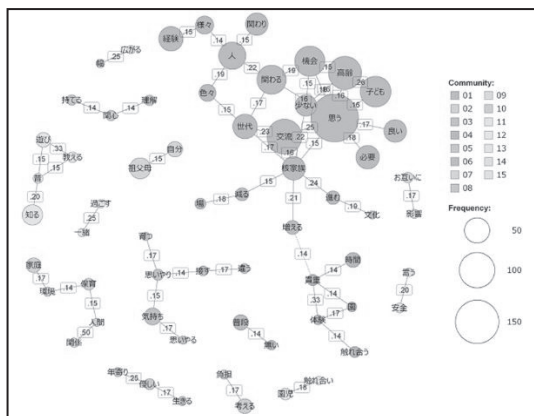


図11. 必要性の理由に関する共起ネットワーク

2) 世代間交流は子どもにより影響をあたえるか
 世代間交流の実施が子どもたちにより影響を与えると思うかどうかという問いに(1)とても思う(2)そう思う の回答を合わせると82.8%であった。(3)あまりそう思わない(4)思わない の回答を合わせると2.9%であった。無回答が14.3%であり、子どもへの影響については、大半が良い影響を与えていることがわかった。

(4) 世代間交流に関して養成校での学び

1) 保育者養成校（学生時）での学び

保育者養成校で世代間交流に関して学んだかどうかを(1)詳しく学んだ(2)学んだ(3)少し学んだ(4)学んでない(5)その他の5件法で回答を求め、経験年数別に表したものが表4と図12である。

表4. 経験年数別養成校での学びの有無

経験年数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	無回答
3年以下	3	29	37	27	3	9
4年から10年未満	4	15	53	55	5	4
10年から20年未満	1	17	42	59	9	15
20年以上	1	10	27	72	14	15

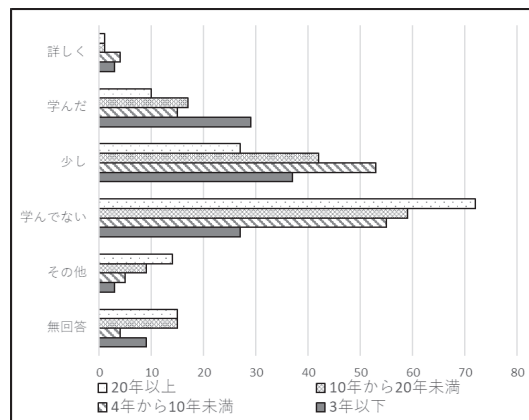


図12. 経験年数別養成校での学び

経験年数別に学んだかどうかについての結果を図13から図16に示す。

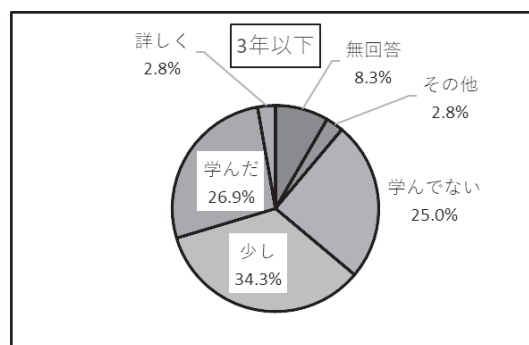


図13. 経験年数3年以下の学び経験

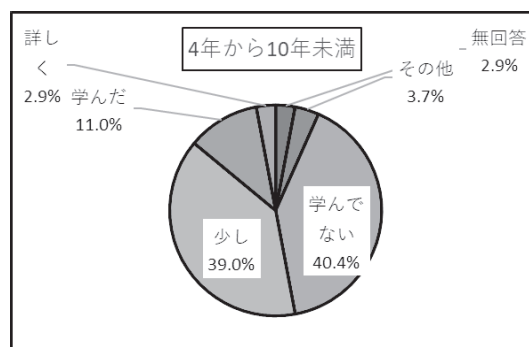


図14. 経験年数4年から10年未満の学び経験

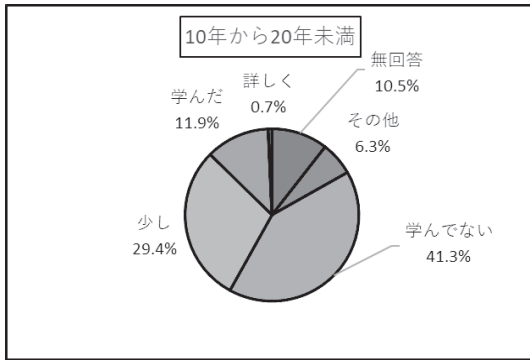


図15. 経験年数10年から20年未満の学び経験

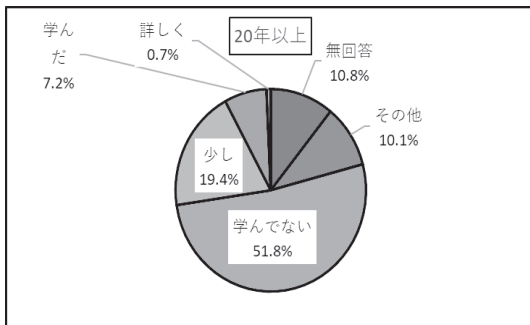


図16. 経験年数20年以上の学び経験

3) 養成校で学んでおきたい内容

質問項目を世代間交流に関して必要な知識や技術を身につけるために学んでおくべき内容を想定し、質問項目を7つとその他を合わせて8つの選択肢から回答を求めた。その結果が図18である。

伝承遊びや交流で活用できる保育技術、世代間交流の実践事例など、保育現場で即実践できるような内容を学んでおきたいと考えている保育者が多いことがわかった。高齢者への援助方法や老年心理学、高齢者施設での体験学習など、高齢者に関する内容については、学びたいと思っている保育者は少数であると分かった。

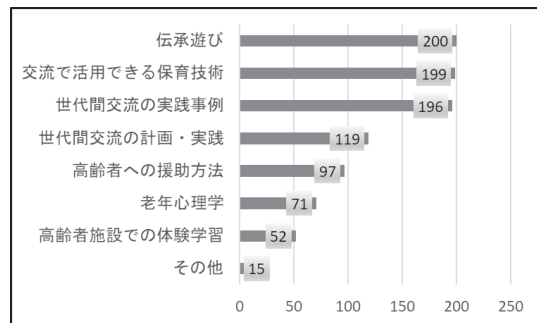


図18. 世代間交流に関して学んだおきたい内容

2) 学んだ科目

上記の質問で「詳しく学んだ」「学んだ」「少し学んだ」と回答した人の内、どの授業科目で学んだのか回答を求めた。授業科目は本学のシラバスを参考に人間関係や世代間交流を取り上げている科目として8科目取り上げ、その他を含めた9つの項目から回答を求めた。その結果が図17である。

保育内容（人間関係）が最も多く、学外実習や実習指導など、実習に関わる科目でも学んでいることがわかった。また乳児保育や保育者論、その他の項目の記述欄には「社会福祉」「子どもの家庭支援」「介護福祉士の資格を持っていてその科目」という回答があり、様々な科目で学んでいることがわかった。

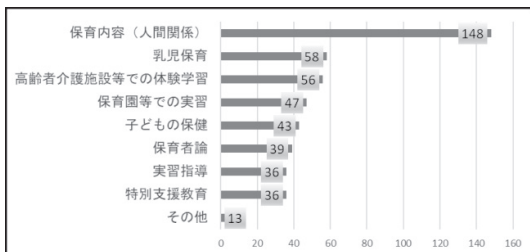


図17. 世代間交流に関して学んだ科目

5. 世代間交流の好事例報告

世代間交流の実践報告・研究成果報告会にて令和3年3月6日（資料1参照）

「地域交流で育つ子どもたち」

～れんか畑に行ってきます！～

大阪府の北東に位置する門真市の社会福祉法人晋栄福祉会 幼保連携型認定こども園智鳥保育園と地域の高齢者施設との交流の実践報告。交流回数は、月に2回、園の子どもたちが隣にある老人ホームの畑に行き、高齢者と交流をしているという報告である。

近年核家族化は進行し、外遊び時間も少なく、自然とのふれあいもほとんどないという現状である。そのような中、保育園の子どもたちは、当初、畑に行くこと自体を怖がり、土に慣れず、虫を怖がっていたという。しかし「れんか」の利用者である高齢者に優しく声をかけてもらい、野菜に触れ、畑にいる虫に触れ、高齢者と一緒に畑仕事をするうちに、子どもに変化が表れたという。子どもの自立心や好奇心、思考力が豊かになり、協同性や道徳心が芽生え、豊かな感性や表現ができるようになったということを報告された。

交流先の高齢者施設「街かどケアホームれんか」は2006年に運営が開始されたグループホームであり、高齢者の主体性を大切にされた施設である。「れんか」の畑は園から大人の足で徒歩3分、敷地に隣接しており、敷地内と言ってもいいほどの距離である。畑に行くま

での道順も車が往来するような道路ではないため、安全な移動が確保されているという環境である。畑の管理をしているのは、「れんか」であり、園は作物の水やりや草取りなどの栽培活動で交流をさせてもらっている。地域とのつながりを大切にしていこうという目的で始まったこの保育施設と高齢者施設の交流は、精神衛生上の豊かさだけでなく、子どもたちの食育につながり、科学的な好奇心も揺さぶり、子どもの主体性を育む欠かせない時間となっているという。

保育園は「れんか」ができる前から同法人内の高齢者施設と交流を実施していた。園が始まった43年前から、高齢者施設、特にデイサービスの高齢者の誕生日会に毎月出向き、歌を歌ったり、手遊びしたりという交流をしていたという。

3年前、れんかと園双方の施設の職員が、同じ地域のボランティアグループの役員をすることで面識ができた。このボランティアを通して、「れんか」の職員からの「子どもたちが畑に来てくれれば・・・」という声をきっかけに、園の3歳児が「れんか」の畑を訪ねるようになったという。ここから智鳥保育園とれんかの交流がスタートした。

私たち保育者養成校の教員は、高齢者との世代間交流の内容を主に行事としてとらえていた傾向が強かった。この実践報告の智鳥保育園も「れんか」と交流をする前は、行事を通して高齢者施設との交流をしていた。

アンケート調査の自由記述からは、特別な準備をしない、普段の保育をそのまま実践する世代間交流が、「保育者が負担を感じない」と導き出された。これれんかと智鳥保育園が、まさしく自然な形で実践していた。自然を介しての普段の交流で、子ども、高齢者双方がお互いに豊かな気持ちとなっている事がこの実践報告で実証された形となった。

6. 考察

以上の結果を受けて、2つの観点で考察を行った。一つは保育現場の世代間交流の調査から浮かび上がったメリットと課題である。二つ目は保育者を養成する段階で教えることが望ましい、世代間交流を実践する上での保育者の役割と必要な知識、技術についてである。

まず一つ目の観点である、世代間交流のメリットは、保育者が感じた子どもの姿や行動の変容と、必要だと感じた理由から、核家族化で高齢者と関わる機会が少ない現代の子どもたちが、自分の祖父母だけでなく、様々な高齢者と関わることで、高齢者のことを理解し、伝承遊びなど文化の継承ができること、そして、子どもが穏やかになり、思いやりの気持ちをもつといった、

精神的な心の育ちを保育者が感じられたことが大きなメリットと言える。

また、実施状況の調査から、実施している施設は、負担感が少ないと感じている保育者のほうが、負担感があると感じている保育者よりも多いということが分かった。先行研究藤原（2012）では介護者や保育者の負担が世代間交流の普及を阻害していると述べていたが、そういった負担を課題として捉え、世代間交流を負担なく行えるように様々な工夫をし、改善してきたことが推察された。具体的には、普段の保育で取り組んだ内容を高齢者に発表したり、高齢者も親しみのある、子どもに伝えたい伝承遊びを普段の保育の中で取り入れ、一緒に遊んだり、教えてもらったりするなど特別な準備の必要がない自然な交流になるように工夫していることが窺えた。

また、年に数回の交流が大半であることがわかったが、その数回の交流でも、子どもたちの様々な望ましい変化がみられ、世代間交流をして良かったと感じている保育者が多いことがわかった。幼児が歌や楽器の演奏をみてもらうという披露型交流でも、一方向の交流ではなく、高齢者も嬉しさや温かさを感じ、子どもも喜びを感じているという連（2017）の研究と同様に、双方にとって効果があると考察できる。

アンケート結果では、日常的な交流が1割程度とまだまだ少ない中、好事例として紹介した、幼保連携型認定こども園智鳥保育園の取り組みでは、栽培活動を通して、継続的に交流することで、より自然なかたちで子どもたちが高齢者と関わることに繋がる事が報告されている。今後、年数回の交流から日常的な交流に繋がっていくよう、地域や高齢者施設との連携は重要な課題といえる。

また、金森（2012）が指摘するように、交流の回数や内容よりも、乳幼児と高齢者の親密性が重要であり、保育者が乳幼児と高齢者のかかわりをどのように援助するかということが非常に重要だと分かる。人の発達を生涯発達という視点でとらえ、高齢者に対する敬意や「古い」の理解、援助方法などを学んでおくことも課題だと考えられる。

二つ目の観点である、保育者の養成段階での世代間交流の学びについてである。

世代間交流について学んだかどうかの質問に勤務経験3年以下の回答者の64.0%は学んだと回答している。それ以上の経験年数では学んでいないとの回答が経験年数が上がるごとに増えている。日本の世代間交流の歴史は約40年と長い、平成28年に出された中央教育審議「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」では、「よりよい学校教育を通じ

てよりよい社会を創る、という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子共たちに育む」とあり、地域や社会とのつながりに重点を置いている。それを踏まえ、平成30年4月施行の幼稚園教育要領等で、「様々な世代との交流を推進すること」を求めており、それを受けて、保育者養成校でも教授すべき内容として扱うようになったと推察できる。また、学んでおきたい内容として、具体的な実践事例や保育技術、伝承遊びなどを保育者は感じており、保育の現場で即実践できる知識や技術を学びたいと感じていることがわかった。

さらに、学んだ科目については保育内容人間関係が多かったが、その他様々な科目も挙がっており、科目間の連携が必要だと考察できた。教授すべき内容について、共通部分とそれぞれの専門部分とが相互に連携してカリキュラムや各科目のシラバスを検討していくことが必要であると考えられた。

以上2つの観点から、保育現場で世代間交流が普及するために必要な保育者養成教育について次の3つの内容が考察できた。

一つ目に「高齢者理解」である。高齢者に対する敬意や理解、とりわけ保育者自身も高齢者との関わりが少ない場合が多く、保育者が子どもを通して、高齢者と交流する機会にもなるので、高齢者の心身や「老い」などに関する知識は学んでおくことが望ましいと考察できる。また、交流の困難さの理由として、自園での交流の際、車椅子の方などを受け入れる環境や配慮などが難しいという点が挙げられたことから、高齢者を理解し、必要な環境構成や援助方法について検討することが重要になってくると考えられる。

二つ目は「世代間交流を実践するための能力」である。交流の意義、目的と具体的な計画案作成、実践できる内容や技術を身につけるなど、保育現場で実践できる具体的な内容を学んでおくことが望ましい。これは、保育者等の学んでおきたいことから明らかに必要な知識、技術である。

三つ目は「連携する力」である。介護者との連携、子どもと高齢者を繋ぐ役割、地域との連携など、多様な人と連携する力、例えば、コミュニケーション能力や援助や支援の技術などを学ぶ必要がある。

特に、保育者が感じる困難さの中に、子どもが「不安がる」「泣き出す」「怖がる」などの姿が見られることがある。普段関わりが無い知らない高齢者に対してこのような反応をすることは大いに考えられるが、そういった場面で保育者がどのように関わるかで、子どもの気持ちや行動は変わると考えられる。子どもの思いを受け止めつつ、無理強いせず、時間をかけてゆっくりと間を取り持つことが出来れば、子どもも保育

者と一緒に高齢者と触れあうことができ、三世代交流として、意義のある交流となるであろう。

このような様々な学びを提供するために、各教科間の連携は不可欠である。われわれ養成校教員はそのことを意識した上で、カリキュラムを考え、授業を展開していくことが重要である。

次に研究Ⅱでは、全国保育士養成協議会近畿ブロック加盟校に人間関係や世代間交流にかかわる科目を担当している教員へのアンケート調査を実施し、保育者養成校での世代間交流の授業実施状況や教員の意識について調査を行った。

第3章 研究Ⅱ

1. 目的

本研究では、保育者養成校における、世代間交流に関する学修の実施状況と養成校教員の世代間交流に対する意識調査を実施し、世代間交流の普及に向けた指導内容について検討する。

2. 方法

全国保育士養成協議会近畿ブロック加盟校（99校）を対象に、アンケート調査を行った。（2020年11月）世代間交流に関する学修内容の実施状況と養成校教員の世代間交流に対する意識についてアンケートの結果を考察し、世代間交流の普及に向けた指導について検討する。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮に関しては、勤務先である四條畷学園の「教員の研究活動並びに研究倫理規定」に則って「研究実施計画申請書」を提出し、学内の研究倫理審査委員会により承認を得た。研究協力施設に、最初に本調査の意義と個人情報の配慮について説明を行い、承諾を得て行った。提供された情報については匿名で記述し、質問紙は統計処理を行い、個人が特定されないように配慮した。

4. 結果

全回答数は27、回収率27.3%

(1)所属、職位、経験年数、担当科目

1) 所属

短期大学と大学が同数で44.4%、専門学校が2校で7.4%であった。

2) 職位

教授29.6%、准教授33.3%、講師25.9%と各職位とも3割程度であった。

3) 保育者養成校 経験年数

表6. 地域のコンコダンス

学びになっている。◇乳幼児の笑顔が	地域	住民や高齢者に元気と活力を与えて
与えていくこと。◇また、そのことより、	地域	の人々とのつながりが広がり、コミュニ
◇乳幼児と高齢者というくくりではなく、	地域	における、多世代での交流という視点
での交流という視点でとりあげている。◇	地域	の人や遊び場など社会資源に対して、
とらえていた◇家族でも先生でもない◇	地域	“大人”の存在と“心”を通わせる事例

TMの分析を行い、世代間交流が良いと感じた点についての共起ネットワーク(図21)では、6つのサブグラフができ、①乳幼児と高齢者 ②現代社会 ③家族 ④幼児教育 ⑤子どもの育ち ⑥世代交流となっている。

交流することは、子どもの育ちにつながる。幼児教育を通して学生と家族とのつながりを感じることができることなど、人と人とのつながりを体験することができることが良いと読み取れる。

乳幼児と高齢者が関わる機会を作ることは双方にとって重要であるが、教員は学生自身への良い影響があると感じていた。多世代との関わりが少ない学生が、多様な人や社会とつながりを持ち、居住地域のコミュニティが希薄な現代において、授業での体験で高齢者と乳幼児の架け橋になる経験ができることが、学生自身の学びにつながっていると記述している教員がいるのである。交流の中で「学生」はどのような文節にいるかをみるために、学生のコンコダンスを見た。学生の言葉の前後には、学生への良い影響が書かれており、世代間交流は高齢者と乳幼児だけではなく、学生への良い影響と捉えていることが具体的にわかるものとなっている。「地域」のコンコダンスは少ないが、運営の基準にある「地域」という言葉とは別の意味を指し、乳幼児と地域の人たちとの関わりが直接的に必要であると述べている。

保育者養成の運営の基準においては、世代間交流という言葉はなく、「地域」は複数出現する。養成校の教員は「地域」のコンコダンスから、地域に住む人々とのつながりを人間関係として捉えていることがわかる。

対応分析は、上位、中位、下位とほぼ3つのグループがあることがわかった。この中で「世代」という言葉から、コンコダンスを見ると、学び、理解、社会、地域、といった身の回りの生活環境の学びと直結していることが読み取れる。

表7. 「世代」のコンコダンス

◇さらに、あらゆる	世代	を知ることは、互いの学びに伝わる。少子高齢化で
い学びに伝わる。少子高齢化では、互いの(各々の	世代	の理解がよりよい社会につながる。互いの相互理解
ために、人とかかわるスキルの学習においても必要◇各	世代	における育ちや考え方の特性を知り、多方面の
とれ合う機会が減少しているため◇高齢化社会では、	世代	間の交流により、高齢者と乳幼児それぞれが、年齢
上の生活や遊びであると考えます。◇社会はいろいろな	世代	の人々の交流を通して成り立っていることを学ぶ機会
乳幼児と高齢者というくくりではなく、地域における、多	世代	での交流という視点でとりあげている。地域の人や遊
遊することは必須であるから◇現在、社会全体の中で	世代	間交流の場が少なくなっている。◇近年、

乳幼児と高齢者との関わりが良いというだけでなく、学んでいる学生を含んだ多世代の交流がさらに良いと感じている教員がいることがわかる。地域における多世代での交流や子どもの育ちの中での多くの世代の人と交流する意義、自然に世代間交流ができない多世代の連鎖が途切れている現状を未来の保育者が学ぶことで、今後、発展的な交流を計画することができる機会を作ることへの意義を感じてほしい。

乳幼児と高齢者や地域の多様な人々との関わりも支援していくことが必要であると理解できるという良さがあると述べられていた。

学生が将来保育者となった時に、自身の生活の中で世代間交流を経験していなくても、養成校の授業で交流を体験したことで、保育計画を立てることができるようになる可能性も見えてきた。

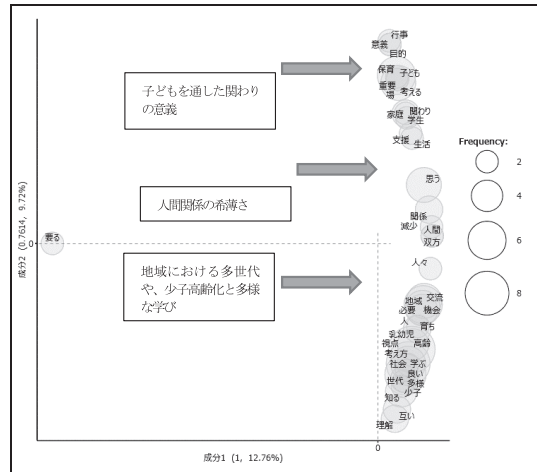


図22. 世代間交流を教えることで良いと感じた点 対応分析

4) 世代間交流の内容を授業で教えることで、難しいと感じた点

実際に世代間交流に関する授業を行って、難しいと感じた点について自由記述を求めた。その結果を表8に示す。記述のあった回答数は13件であった。(表8)

表8. 世代間交流の内容を授業で教えることで難しいと感じた点(自由記述)

視覚教材の確保の困難さ。
特に難しいと感じたことはありません
同居家族が少なくなり、祖父母との関わり経験の少ない学生に対して、交流の意義を言葉ではなく、身体で感じさせる等

<p>祖父母と乳幼児との関わりまでは想像することができるか、地域の高齢者と乳幼児との関わりまで想定させることが学生にとっては難しい。</p> <p>事例として伝えているが、学生本人も交流の機会が無い為、理解度が低いと感じる</p>
<p>家庭内で過ごす子どもが多いことや、コロナ感染で地域に出かけることを減少されていることで、交流の場が全くといっていい程中止されている中での取り組みをどのような形でつないでいくかについて。</p>
<p>今年度は、実践的に学ぶという点で制約があり、事例といってもビデオ学習にならざるを得なかった。体感することの限界を感じた。</p>
<p>短期大学では時数が充分でないので時間をとりにくい。</p>
<p>実際に幼稚園などで幼児が世代間交流をしている姿が観察できるといいですが、その機会の設定は難しいです。</p>
<p>世代間交流の内容に触れるまでの基礎知識が思ったより、学生に必要であった。・限られた時間で触れるので内容も限定される。</p>
<p>高齢者の側についての理解</p>
<p>リアルタイムに実感してもらう事</p>

教員以前の職において、自然に年間行事等で世代間交流を行っていた教員は、この交流を行うのに関して物理的な条件に対してはなんら問題を感じていないという一方で、学生側の問題をあげている教員はいる。学生の経験不足から世代間交流だけを教えるても、理解することの難しさを捉えられる質問となった。このことは後のコンコーダンスの部分で述べる。

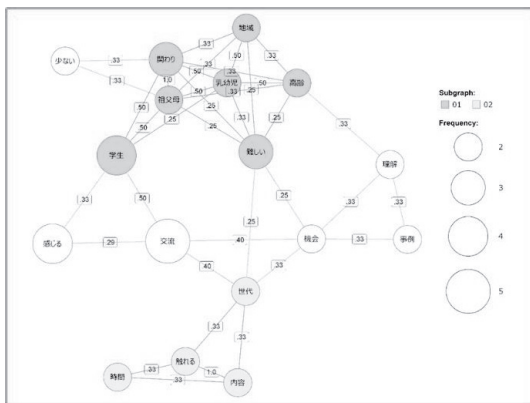


図23. 世代間交流の内容を授業で教えることで難しいと感じた点 共起ネットワーク図

難しさの共起ネットワークからは、3つのサブグラフができた。今まで「良い点」や「必要」と回答されていた文章が、難しさとして表れているのである。例えば①祖父母や高齢者、乳幼児と地域で関わるのが難しいとある。②交流する機会 ③時間となっている。交流する機会を自然に作り出すことは難しく、また授業時間の確保も難しい。世代間交流は必要であるし、良さもあるが、総じてこの時間

を確保し、学生に体験させ、世代間交流である高齢者と乳幼児の関わりを体験させることは難しいことがわかる。

そういった物理的な条件の難しさもあるが、「高齢者との関わりが少ない学生に体験的な学びを与え、理解を深めること」が難しいとも挙げられていた。

教員の自由記述で学生に世代間交流を教える前に基礎知識を教えることが必要だったこともある。これは保育者教育の現状としても、教養の必要性が問われている中、大切なことを教えようとしても、その前段階の教育の不足を感じることは多くあり、ただ世代間交流教育を行えばいいというものでもない。現代の学生への課題も垣間見えることになった。

授業で取り上げる困難さに関しては、教材の少なさをあげている教員もいる。

2022年に厚生労働省から発出されている「子どもの育ちに関する現状」では、子どもの育ちをめぐる現状について書かれている。この分析によると、一人っ子は42%を占め、二人の兄弟姉妹を合わせると85%になる。放課後や休みの日によく遊ぶ場所は、家の中や友達の家が大多数で、外遊びが少ない。大人との関わりが少なく子どもだけで過ごしていることが多い。近所の大人からしかられたり助けられたりした経験のある青少年が少ないことも明らかである。反対に、大人との関わりがある子どものことも記述されており、人からほめられたりしかられたりした経験の多い小中学生のほうが、生活習慣や道徳観・正義感が身についているものが多いともある。このことから大人との関わりが大切であることもわかる。

養成校の授業において、時間の足りない中、教材が乏しい中、経験の少ない学生に動画や写真教材を使っても、多世代との経験が生活の中に無かった学生たちにとって、多世代の関わり的重要性を頭の中で想起させることの難しさがあることも示唆できるのではないだろうか。

表9. 学生のコンコーダンス

<p>くなくなった◇祖父母との関わり経験の少ない学生に対して、交流の意義を言葉ではなく、身体者と乳幼児との関わりまで想定させることが学生にとっては難しい。◇事例として伝えているが本人も交流の機会が無い為、理解度が低いと感じる◇地域に出かけることを減少されている◇コロナで交流の場が全くといっていい程中止されている◇中程中にくい。◇実際に幼稚園などで幼児が世代間交流をしている姿を観察できるといいですが、その機会の設定は難しいです。◇世代間交流の内容に触れるまでの基礎知識が思ったより</p>

表10. 交流のコンコーダンス

<p>父母との関わり経験の少ない学生に対して、交流の意義を言葉ではなく、身体で感じさせる等しい。◇事例として伝えているが、学生本人も交流の機会が無い為、理解度が低いと感じる◇地域に出かけることを減少されている◇コロナで交流の場が全くといっていい程中止されている◇中程中にくい。◇実際に幼稚園などで幼児が世代間交流をしている姿を観察できるといいですが、その機会の設定は難しいです。◇世代間交流の内容に触れるまでの基礎知識が思ったより</p>

学生と「交流」のコンコーダンスを見ると、経験の少ない学生、想起、想定させることの難しさ、学生本人の交流の機会が無さ、基礎知識は学生によって差異があるといった学生の課題からも、世代間交流を実直に教える前に、学生の基礎的な力の足りなさを感じさせるものとなっている。また「交流」のコンコーダンスは、交流の意義を身体で感じさせること、コロナで交流の場がないこと、必ずしも実体験できるわけではないこと、など、これも学生の問題点があがっている。授業の準備をする前に、授業を受ける学生自身の基礎学力や体験の有無などを調査し、世代間交流の知識がどこまで修得できるかの見通しをつける必要性も見えてきた。

(4)世代感交流に関する意識

1) 世代間交流を授業で取り上げる必要性

世代間交流を授業で取り上げることにについて、(1)とても必要(2)必要(3)どちらかという必要(4)ほとんど必要(5)不要の4件法で回答を求めた。どちらかという必要が37.0%と一番多いが、とても必要、必要とそれぞれ30%前後となっており、教員間の意識のばらつきがみられた。(図24)

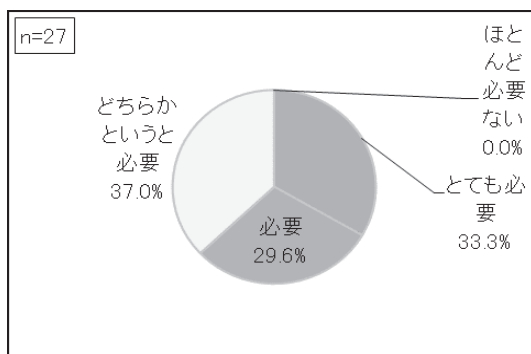


図24. 世代間交流を取り上げる必要性

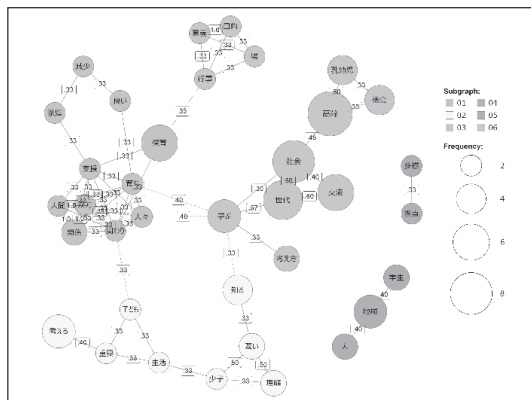


図25. 授業で取り上げる必要性 共起ネットワーク

世代間交流を授業で取り上げる必要性を、共起ネットワークで表した。6つのサブグラフができ、①社会全体の世代について学ぶ ②保育を通じた人々との関わり ③世代間交流の重要性を考え理解する ④世代間交流行事の意義 ⑤学生と地域 ⑥多様な視点 世代間交流は、保育を通して、人と人をつなげ、学生も巻き込まれながら、社会全体の人間関係を学ぶことのできる機会をつくっていることがわかる。大人との関わりや、世代間の体験の少ない学生も、世代間交流を学ぶことによって自分の身の回りにはない社会全体のつながりや、授業を通して学べること、また保育を学ぶことによって、子どもの育ちにつながっていることが気づける可能性がある。学生自身や、子どもの育ちを通して世代間交流の必要性を学ぶことも考えられるのである(図25)。

授業で取り上げる理由に関して、共起ネットワークにて7つのサブグラフが生成できた(図26)。理由と必要性の内容は似ているが、サブグラフごとにまとめてみたい。

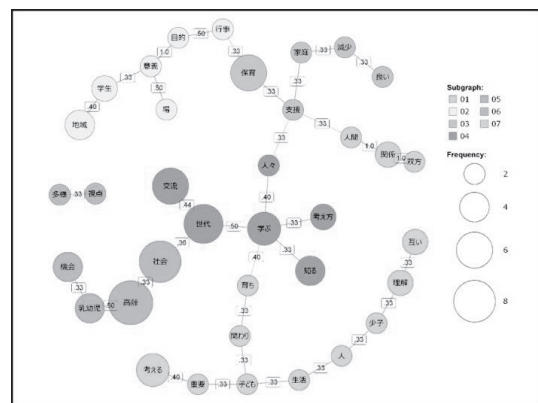


図26. 授業で取り上げる理由 共起ネットワーク図

①世代間交流の考え方を学べる②学生が地域と関わる意義、③保育と家庭④乳幼児と高齢者⑤相互理解⑥多様な視点⑦人間関係。少子高齢者社会への懸念や、高齢者、子ども、そして学生が相互理解をすることの意義、高齢者に接することの少ない学生が、子どもへの教育を通して自分たちもさらに学びができることを感じ取っていくことの大切さ、保育者養成ならではの体験ができることを有意義に感じているのではないと思われる結果となった。

保育者養成の中のカリキュラムの中に世代間交流は出てこない、そして各養成校での采配で世代間が取り上げられる理由としては、保育所保育指針、幼稚園教育要領にその必要性が書かれていることが理由ではないかと考えられる。今回の研究でその質問をとりあげなかったが、教員の体験と共に、指導要領や指針が影響しているのかも明らかにしていかななくてはならないと感じている。

2) 対象児別の交流内容

0歳児から5歳児までの交流活動の内容をAからFまでの以下の内容(研究Iと同様のもの)の中で、交流活動としてふさわしい内容と思うものを複数回答で求め、その結果を表11、図27に示した。

- A. 行事交流(ひな祭り、敬老の日、運動会、誕生日会等)
- B. レクリエーション(バルーン・ゲーム遊び)
- C. 伝承遊び(コマ・けん玉・あやとり・お手玉等)
- D. 創作活動(作品作り・折紙・工作・おやつ作り等)
- E. 芸術活動(合奏・歌遊び・楽器演奏等)
- F. スキンシップ・会話(乳児の抱っこ・肩もみ等)

表11. 年齢別交流内容の回答数

交流内容	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
行事交流(ひな祭り・敬老会・運動会・誕生日会等)	2	4	9	16	18	21
レクリエーション(バルーン・ゲーム遊び等)	0	1	3	11	19	19
伝承遊び(コマ・けん玉・あやとり・お手玉等)	0	1	3	12	23	24
創作活動(作品作り・折紙・工作・おやつ作り等)	1	1	4	11	21	22
芸術活動(合奏・歌遊び・楽器演奏等)	3	3	6	12	17	22
スキンシップ・会話(乳児の抱っこ・肩もみ等)	12	14	13	9	9	12

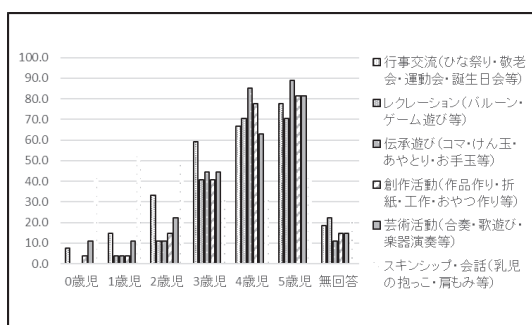


図27. 年齢別交流内容の回答数

養成校教員がふさわしいと考える対象年齢は3歳以上の幼児との交流が多い。内容については、4・5歳児では大きな差は見られなかった。保育現場の結果と比較すると、行事交流やスキンシップなど、それぞれの内容で相違点が見られた。

3) 交流活動を通して育ってほしい子どもの姿

交流活動を通して育ってほしい子どもの姿を研究Iと同じ項目で回答を求めた。その結果が図28である。「高齢者への関心・理解が深まる」「伝統文化(伝承遊び)への興味が深まる」が88.9%と高く、「気持ちが穏やかになる」「年輩者に対して尊敬の念を持つ」が48.1%であった。育ってほしいと期待する姿と保育現場の実際に育ったと思える姿では差異がみられた。養成校教員のほうが、それぞれの値が高く、実態との齟齬があると推察できた。

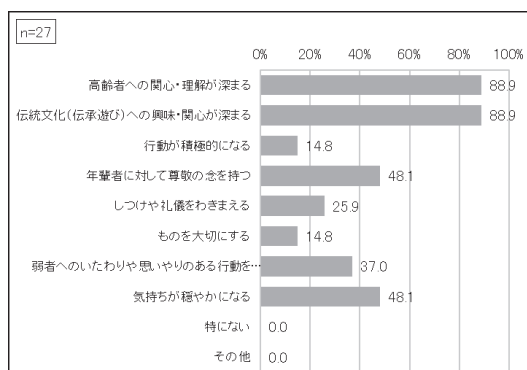


図28. 交流活動を通して育ってほしい姿

4) 世代間交流を取り扱うべき授業科目

世代間交流を取り扱うべき授業科目について研究Iと同じ項目で回答を求めた。その結果が図29である。

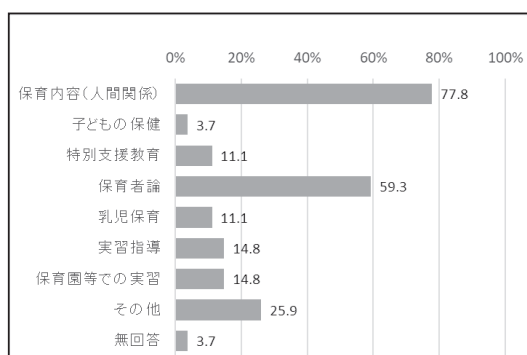


図29. 世代間交流を取り扱うべき授業科目

保育内容「人間関係」で取り扱うべきという回答が78.8%と一番多く次に保育者論が59.3%と多くなった。また、次に多い値はその他であり、「子育て支援」「家庭支援」「社会福祉」と福祉系の科目で取り扱うべきという回答があった。

5) 世代間交流について学生に教授すべきと思われる内容とその時間数

学生に教授すべき内容を自由記述で求めた。回答数は21件で、その結果が表7である。

交流の意義や目的を、事例を通して教授することや、具体的な実施計画を考えること、そして、高齢者に限らず様々な世代や障害のある方など多様な人との交流について教授することが望ましいという考えがみられた。

6) 世代間交流の実践経験

これまで、養成校教員として、あるいは保育者として

て世代間交流の実践経験があるかどうか回答を求めたところ、図30のような結果になった。約半数が「保育者として経験がある」との回答であり、25.9%の「養成校教員として経験がある」との回答と合わせると76%が世代間交流の実践経験がある

研究 I と同様に、世代間交流の実践経験別に世代間交流の内容を授業で取り上げることについて必要かどうかの回答を示したものが図31と図32である。

実践経験があるほうが、必要だと感じている割合が高いことが分かった。

実践経験があるとの回答者に具体的な実践内容と役割について自由記述で回答を求めた。回答数は20件で、その結果を養成校、保育現場別にまとめ、表13に示した。

表12. 学生に教授すべき内容 自由記述

世代間交流の実践事例とその目的意義
高齢者とかかわる時の配慮・支援の具体的方法
老年心理をふまえた。交流の意義と目的
実践事例とその学びについて
「乳幼児と高齢者」というくりでなく、「若年健常者と障害者・弱者」といった感じで講義をくんでいる。
保育の現場における世代間交流とは(実際の実践内容)
実践事例、活用できる保育技術
世代間交流の計画、実践
子どもを取り巻く地域環境(人的環境)
交流の目的やねらいを考える機会
子どもが与える「元気の素」について。人は誕生から死を迎えるまで「人・もの・こと」とかかわり学びにつながる。
伝統文化など、古くからの知恵を学ぶ。
高齢者と子どものかかわり方の援助方法
自身の体験を踏まえて、交流行事を計画してみる。
教育要領の中にも明記されている事項であること。
“遊び”をとおして、さまざまな世代や地域とつながることを複数の科目でとりあげる。
行事での交流
地域で世代間交流が求められる背景。具体的な園・施設などで行われている内容。事例をきくことで意義と大切さを知る。
「意義・目的」「世代間交流の実践事例」「世代間交流のメリット・デメリット」
実践事例を学び、その意義やそれを計画する際の配慮事項について討論等を行う。
多世代との交流方法を知る。世代間交流の実際を実践者から聞く。交流の具体的スキルを学ぶ。

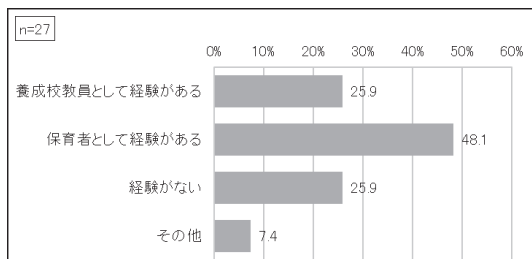


図30. 世代間交流の実践経験

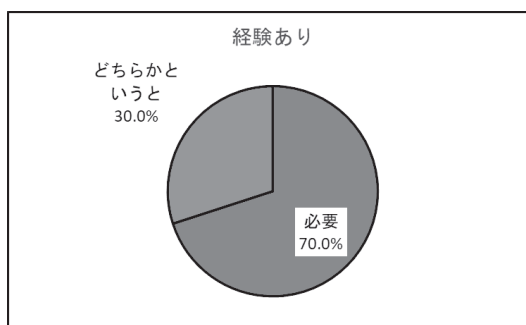


図31. 授業で取り上げる必要性 (実践経験あり)

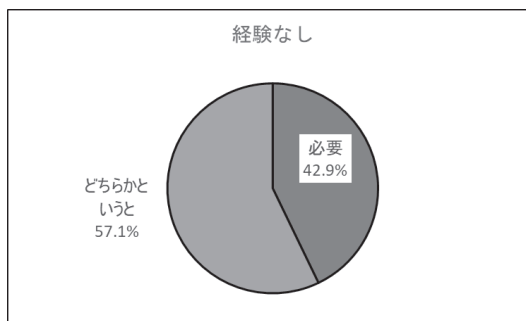


図32. 授業で取り上げる必要性 (実践経験なし)

表13. 具体的な実践内容 自由記述

	具体的な実践内容
養成校教員として 5名	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の子育て支援施設で乳幼児と高齢者のイベントのコーディネートをした。 ・現場実践の紹介とゲストスピーカーによるミニセッションを実施 ・幼稚園での交流活動に参加し、保育者の一人として活動を援助した。 ・介護福祉士として、いつも高齢者・障害者の援助を行っている
保育現場 13名	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の高齢者施設や「生き生きサロン」に出向き、歌や合奏の発表、触れあい遊び、伝承遊びなどを行う ・野菜の栽培、収穫を高齢者と一緒に行い、収穫パーティーなどを行った。 ・七夕などの行事交流を行った。
その他 2名	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動に参加者としてかかわった ・介護福祉士養成の中で、子どもとの交流を行い、指導者としてかかわった

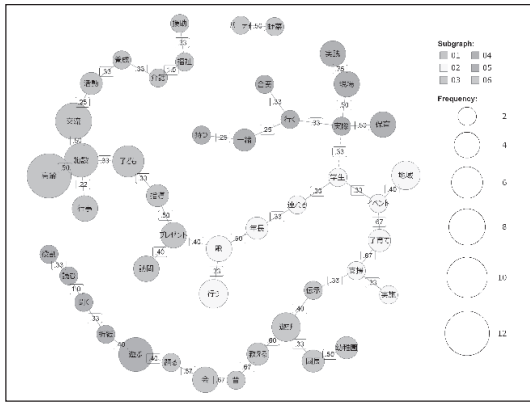


図33. 授業実践内容と自身の役割 共起ネットワーク図

授業実践内容と教員自身の役割についてのサブグラフは6つ(図33)。**①**高齢者施設への訪問、**②**年長組の関わりと子育て支援、**③**折り紙、絵本、**④**遊びを通した高齢者からの教え、**⑤**保育現場での実践、**⑥**食物を通した学びなどだ。実際に学外へ出て、保育現場や高齢者施設を訪れ、活動していることがわかる。活動的な部分と、高齢者の動きに合わせた穏やかな活動と、分かれていることがわかる。図34はさらに係数を0.4以上に限定した時の共起ネットワーク図となる。実践内容がさらに大きな分類になっている。

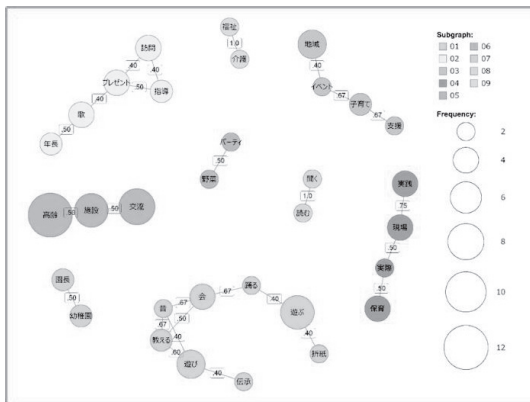


図34. 実践事例 係数0.4以上

実際には、保育施設行事(祖父母参観)、養成校行事(学祭等)、地域の高齢者サロン、高齢者施設行事、郊外実践(農作業を通して)、野菜収穫、餅つき、読み聞かせ、折り紙教室、伝承遊び、歌って踊る会、七夕、地域子育て支援施設行事などが、教員が実践している世代間交流だった。

養成校教員として、世代間交流のコーディネートをしていたり、学生が世代間交流のイベントを企画し、地域の高齢者施設で実施できるよう指導したりと、実践的に深く関わっている場合や、保育現場で園長や保育者として、行事交流、合奏や合唱の披露、一年を通じての野菜栽培での交流など、実際の交流内容を計画

実践している場合などがあることが分かった。これらの教員たちは、自分たちが幼稚園や保育所等で勤務している経験があり、実践したことがある保育者であった。

5. 考察

乳幼児と高齢者との世代間交流に関する内容を授業で取り上げているかどうか調査した結果、27名中16名の教員が取り入れているとの回答であった。授業で取り上げることの必要性や担当科目、教員の世代間交流に関する実践経験などは形式等様々であり、現状では、出身職種や教員の経験によって違いがあることから養成校によってその教育に差がでることも明らかになった。

授業で取り上げた場合の良さを「学生が世代間交流の授業を受けることで、実際に保育現場に出たときに、意義や子どもの育ちを理解し、実践することに役立つ」、「保育の仕事は、乳幼児の保育、教育と保護者支援だけでなく、乳幼児と高齢者や地域の多様な人々との関わりも支援していくことが必要であると理解できる」とある。すなわち、世代間交流について授業で教授することは、学生が保育者になったときに、世代間交流を計画、実践していく力に繋がるとともに、学校教育の現場で実践され始めた、コミュニティ・スクールのような、地域の多様な人々との関わりを積極的にもち、地域に開かれた保育施設として実践を繋げていくという重要な役割についての知識をすでに持っている保育者となれることもわかる。そして現場の保育者が、交流をするときにその補助的役割を果たせることにつながるのではないかと考えられる。

授業をする際の難しさとして、「高齢者との関わりが少ない学生に体験的な学びを与え、理解を深めること」と記述があり、学生自身が高齢者との関わりが少ない中、世代間で交流することの意義や、高齢者と関わることで子どもの育ちへの影響を間接的に、また体験的に理解できるのではないかと考えられる。しかし、授業を通す中、学生に具体的内容を想起させることの難しさや、基礎知識のない学生に世代間交流を行うことで必要な知識に関しての内容も準備し、交流の意義を理解させる難しさもでてきた。

先行研究から記述した通り、世代間交流プログラムはwell-beingの向上と地域づくりに有効な方法であると述べている。しかし、この現代は人間関係が以前に比べて変化している傾向があり、それは良い方向だけでなく、悪化もしくは劣化、それが様々な問題を引き起こしている原因となっている認識が成立しつつあることとも述べている(2008,遠藤)。

保育現場においてただ単に高齢者と乳幼児を結び付けばよいというわけではないことも教育していかなくてはならない。実体験の少ない学生への教育は、これら人間関係の複雑さや人々の信頼関係が希薄になることで起こる社会の病みがあることも教授する必要があるだろう。(パットナム,2000)。研究Ⅰにおいて、保育者は、高齢者理解がないまま交流をさせる難しさ、高齢者の体力的な動線やその特徴を理解する重要性や、必ずしもいつも双方にとって良い体験になるわけではないとも明らかになった。高齢者と乳幼児との関わりが良い関係になるだけではなく、双方へのメリット、デメリットを理解した上での交流計画を立てる必要がある。介護の現場の職員とも情報の交換を行い、介護現場の職員へは、乳幼児理解を、保育現場の職員は高齢者理解を行うことで、お互いの立場の理解も深め、より人間関係について専門的に学修を重ね、世代間交流をより良いものへと導ける努力をしていかなくてはならないだろう。

この調査の結果、世代間交流は、一つの科目では教えるべき項目が多く、十分に時間が取れないことがわかった。各教員が様々な授業科目で世代間交流の内容を取り上げているが、教育系、福祉系、保育技術系、心理学系、保健系などそれぞれの専門別に様々な観点から授業に取り入れ、視点を変えて世代間交流の観点を捉える必要性も見えてきた。そして担当教員間で連携を取りながら効率的に、また社会的に人間を捉える内容を、教員間の連携をもって教授していくことが必要であろう。複雑な社会だからこそ、これらの交流を行うすべを教授し、また実体験につながるように養成校での科目を確立することを視野に入れていかなくてはならないと考えられるのだ。

教授すべき内容としては、交流の意義、目的、具体的な交流事例、交流計画、交流に活用できる具体的な知識や技術、交流のメリットデメリットまでアセスメントし、学生が知識としてだけでなく、自身の生活や実感をともなった学びを得られるように工夫することが重要であると分かった。学生が直接高齢者と関わる経験から、高齢者に対して敬意をもち、「老い」に対する心身の変化、生涯発達という観点からの理解が得られるようにすることも重要だと推察できる。今回の調査では、調査対象である教員の数は少ないが、少なくとも今後の社会にとって、世代間交流の意義やそのメリットを感じている教員が授業実践していることが明らかになったのである。

第4章 まとめ

1. 研究Ⅰと研究Ⅱの比較から分かること

保育現場の実態調査と養成校教員の調査を比較してみると、「子どもの変化」に対して実践を通して保育者が感じた姿と養成校教員が期待する姿では、養成校教員のほうが、期待できると考えている人の割合が高く、世代間交流の高い効果をイメージしている人が多いと推察された。また、具体的な活動内容の実際と、養成校教員が考えるふさわしい内容でも、相違が見られ、養成校教員が実際に保育現場で行われている世代間交流について保育現場との連携を深め、理解することが必要だと考察できた。養成校教員間でも世代間交流の必要性に対する意識の相違や経験の違いがあることが分かったので、今の保育者に求められている、子どもと多様な世代との交流に関して、意識を深め授業の中に位置づけていく必要があると考察できた。

2. 世代間交流が普及するための養成教育

研究Ⅰと研究Ⅱの考察から検討する。

研究Ⅰでは、養成教育として以下の3点が必要だと考察できた。一つ目に「高齢者理解」、二つ目は「世代間交流を実践するための能力」、三つ目は「連携する力」である。研究Ⅱでは、世代間交流の授業を通して、地域の多様な人々と関わりを積極的にもち、地域に開かれた保育施設として、実践を繋げていくと言う保育者の役割を理解すること、高齢者と交流することの意義や子どもの育ちを体験的に理解することが保育者になったときに、世代間交流を実践していく力となるということが考察できた。また、教授すべき内容としては、交流の意義、目的、具体的な交流事例、交流計画、交流に活用できる具体的な知識や技術などが上げられ、学生が知識としてだけでなく、実感をともなった学びを得られるように工夫することが重要であると分かった。学生が直接高齢者と関わる経験から、高齢者に対して敬意をもち、人の生涯発達という観点からの理解が得られるようにすることも重要だと推察できた。

ここに述べてきた、世代間交流に関する保育者の役割や力、知識、技術を、研究Ⅰ、Ⅱの結果では、様々な授業科目で取り扱っているという実態が明らかになった。そのことから、養成教育の中で、他にも教えるべき内容が多い中、効率よく世代間交流について学べるように、教育系、福祉系、保育技術系、実習関係、心理学系、保健系など関連する授業科目の担当者が、連携をとりつつ、各専門別の観点から授業に取り入れ、「領域人間関係」に関わる担当者がそれぞれの科目で学んだことを関連させて世代間交流の理解が得られるよう総論的に授業を展開していくことが望ましいのではないかと考察できた。

3. 今後の課題

本研究は「保育における世代間交流に関する調査・研究」報告書から、世代間交流についての養成校の教員へのアンケート結果をより詳細に分析した。乳幼児教育から高等教育においても、多様な人との関わりやその理解が必要であると言われ、また様々な分野でもその必要性についてあげられている。しかし、実際に実践を行うことはすべての教員ができるわけではなく、それぞれの教員が協力しあい、情報の共有をすることで成り立つ部分も多いことから、教科を超えた教員同士の関わりと現場とのつながりを密にする大切さが浮き彫りとなった。

現場の経験がある教員は現場に向いて、授業を行うことができるが、どの教員もできるわけではなく、教材の少なさや、現場とのつながりを作らないと授業につながらないことも推測できる結果となった。現実的に教員の中には、保育福祉施設の経験のみの教員もいるはずである。今後、高齢者施設での実践の経験がない教員も、授業に世代間交流を取り入れられるような教材の普及や、現場とのつながりを応用する接続力も作れるようにしなくてはならない。また保育者になる学生に現実的に実践ができるようにする指導も必要だ。現段階においては、授業時間の問題や、具体的に高齢者施設を訪問し、保育所や子育て支援施設や、地域での高齢者交流等の行事を作り出すことはかなり難しいのかと思われる。

日本は地理的な特徴からも、他民族国家ではない。

多国籍や多様な人が住み暮らしている場所のメリットとしては個性があっても特別視されない。多様な人が共存している地域は、多様だからこそそれぞれの人の理解が進む可能性がある。多様な人々を受け入れることは経済的にも豊かになることも明らかにされている。(2014、井出) 世代間交流は現在求められている、多様性への理解も学ぶことができる一つの方法であるとも考えられる。

子どもたちが小さなころから、年齢や性別、人種や国籍などの枠を超えて、様々な人たちと触れ合うことは、その後の人生において、人を差別しない人格形成につながり、より良い豊かな社会の形成につながっていくことも考えられる。

そして本題の世代間交流は、子どもや高齢者、そして保育者にとって他者を理解し、思いやりや温かい気持ちに繋がる活動であることは本研究でもこれまでの先行研究(藤原2012等)でも明らかなことである。狭い範囲での人との関わりが多くなっている現代の子どもたちに必要な、多様な人々とかかわり、相手を理解し、心地良い関係を築いていくために世代間交流の普

及は重要な課題である。そのためには高齢者と子どもを繋げる保育者を養成していくことがいかに重要であるかは明白なことである。本研究で養成教育の中で、教授すべき内容や方法について検討してきたが、今後は具体的なカリキュラムの位置づけや、授業内容に関する教科間の連携を明確にするとともに、実践的な授業プログラムを構築していくことで、世代間交流の普及に向けた養成教育を探究していきたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました、乳幼児保育教育施設の園長先生はじめ諸先生方、保育士養成協議会近畿ブロック加盟校の先生方、関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国教育の在り方について」1996
- 中央教育審議会第2次答申「21世紀を展望した我が国教育の在り方について」1997
- 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016
- 藤原佳典 世代間交流における実践的研究の現状と課題：老年学研究の視座から 日本世代間交流学会誌 2(1), 3-8, 2012-02
- 實川慎子 高木夏子 栗原ひとみ 山田千愛 高野良子 保育現場の地域連携事業 植草学園大学研究紀要 第11巻 41-51 2019
- 金森由華 高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇 (2), 69-77, 2012
- 喜田昌樹 「データサイエンスの中のテキストマイニング」 Transactions of the Academic Association for Organizational Science 2018 Vol.7, No.2, pp.2098-214
- 文部科学省 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 62, 181 2018
- 連桃季恵 幼児と高齢者の交流活動に関する研究 (1) -A 幼老複合施設での歌を用いた事例から- 金沢星稜大学 人間科学研究 第10巻 第2号 55-60 2017
- 王姿月 中野いく子 世代間交流が幼児の高齢者観に及ぼす影響 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 27(0), 86-96, 2016
- 尾崎司 保育における「高齢者とのかかわり」：世代間交流概念から領域「人間関係」をとらえ直す 東

- 京家政大学教員養成教育推進室年俵 第4巻 57-63
2017
- 吉津昌子 田爪宏二 クロス・トレーニング・プログラムへの参加が世代間交流に対する認識に及ぼす影響—保育者養成課程における検討— 世代間交流学会誌 Vol9 (No.1) 13-22 2019
- 渡辺優子 幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点 静岡青陵大学短期大学部研究報告 第34号 (2004) 15-24
- 黒岩亮子 日本における世代間交流の展開 社会福祉 第59号 85-95,2018
- 松山由美子 保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価 四天王寺大学紀要 第46号 233-253,2008
- 保育所保育指針ハンドブック 汐見稔幸監修 学研 53
- 遠藤由美著 人間関係はいかに well-being と関連するか 現代社会における人間関係の諸相 第1章1-28、2008 関西大学経済・政治研究所
- 井出和貴子 経済調査部 オーストラリア：多文化主義国家の移民政策—時代に応じて制度改正で移民受け入れ成功例に— 大和総研 世界経済,2014
- 西中研二 科文化家族子女といじめ問題について 外国人労働者家族との共生 家庭教育研究 (25)
- 厚生労働省 参考資料 2022 2-2 子どもの育ちに関する現状

付記

本論文は令和2年度 一般社団法人全国保育士養成協議会ブロック研究助成を受けて行った共同研究「保育における世代間交流に関する調査・研究」の報告書の内容に新たに分析を加え加筆修正したものである。共同研究者 金川朋子、合田誠、長谷秀揮、山田秀江、木村美佳、森麻希子、高田昭夫、平野知見

**A Study on Understanding Diversity and Intergenerational Exchange Practices in Childcare Teacher Training
-Survey of intergenerational exchange in childcare settings and a survey of teachers at training
schools for childcare professionals-**

Hidemi Yamada, Mika Kimura

Shijonawate-gakuen Junior College

Abstract

(1) The purpose of this study is to show the necessity of university education to promote intergenerational exchange between the children generation and the elderly generation.

⇒(2) Research I shows the analysis and consideration concerning the result on questionnaire and good examples in nursery teacher training school.

(3) Research II was held in a questionnaire survey toward teachers at nursery training schools. The result showed the merits and challenges based on the activities of intergenerational exchange, the learning and challenges of students at the training stage and furthermore the contents and methods to be taught.

(4) The result and consideration for Research I and II show three abilities necessary to carry out intergenerational exchange as follows (1) understanding toward the elderly generation, (2) ability to practice intergenerational exchange, (3) ability to collaborate.

Consequently, this result of the consideration led us to the conclusion that it should be necessary to reconsider curriculum because of differences in recognition and experience towards intergenerational exchange among universities and teachers there, so that students should acquire experiential learning of specific practice as workers to help children, significance and purpose of its intergenerational exchange and its specific practice content.

Key words : Intergenerational exchange, childcare, Childcare Teacher Training, Diversity, elderly generation, children generation